

やまなみ

題字 会長 谷 公一



平成30年度 災害関連緊急治山事業（養父市八鹿町朝倉 地内） 完成3箇月後

第49号
令和3年1月発行

● 令和3年 知事新春メッセージ「危機を乗り越え、ポストコロナの新時代に挑む」(兵庫県知事 井戸敏三).....	2
● 年頭挨拶「新春を迎えて」(一般社団法人 兵庫県治山林道協会 会長 谷 公一)	3
● 治山・林道コンクール受賞者 林道功労者表彰受賞者の紹介	4
● 「防災・減災、の5か年加速化対策」が決定 国への陳情・要望活動の実施	6
● コロナ禍に初Web開催／第60回治山研究発表会「ひょうご式治山ダム」が二度目の発表 (農政環境部治山課・(一社)兵庫県治山林道協会).....	7
● 「災害に強い森づくり(第3期対策)整備効果の検証」について(農政環境部 森林参事 金子哲朗).....	8・9
● 林業遺産「再度山の植林」に関するエピソード(1) (兵庫県森林組合連合会・元兵庫県六甲治山事務所長 山田裕司).....	10・11
● 森林土木OJTシリーズ ～2.基礎の形式～((一社)兵庫県治山林道協会 総括課長 谷口靖雄)	12・13
● ニホンジカの食害による自然環境の変化(12)シカの好きな植物(近藤伸一)	14・15
● 「六甲山の治山の歴史を訪ねる」ツアーの開催(神戸県民センター 六甲治山事務所)	16・17
● 「六甲山の災害展」の開催とポータルサイトの開設 (神戸県民センター六甲治山事務所・農政環境部農林水産局治山課)	18・19
● ロープネット・ロックボルト併用工法研究会 「令和2年度ロープネット・ロックボルト併用工法研究発表会」(農政環境部農林水産局治山課)	20
● “都市の木造・木質化推進キャンペーンin元町”(第35回ひょうご木材フェア)	21
● 林学職場の風景 ～森林界の働き方～(朝来農林振興事務所・加東農林振興事務所)	22・23
● 協会だより	24

林業遺産「再度山の植林」に関するエピソード①

兵庫県森林組合連合会・元兵庫県六甲治山事務所長 山田裕司

明治時代に再度山周辺で始まった植林は、当時の砂防工事の状況を撮影したガラス原板、施工された石積みなどの遺構など多くの資料が現存しています。これらの工事の概要や前号で記載できなかった関連するエピソードについて、今号と次号の2回に分けて紹介したいと思います。

1. 植林がはじまるまで

神戸港開港以降急激な人口増加とコレラなどの伝染病の流行により、神戸市では上水道の整備が大きな課題でした。明治33年(1900)に生田川の布引滝の上流に水道施設として五本松堰堤(以下「布引ダム」)が完成し、水道事業が始まります。この布引ダムは日本最古の水道専用重力式コンクリートダムで、現在も水道施設として利用されています。

布引ダム上流域の再度山周辺は、入会地として利用されていました。特に再度山北側の字中一里山は、山田村下谷上などの集落と神戸市神戸区などの双方の集落が室町時代から利用権をめぐって争っていた入会地でした。過去から多くの村々による激しい収奪が行われ、特に荒廃が著しかったようです。神戸市では上水道整備の一環として、再度山周辺の植林工事の必要に迫られます。植林工事が始まるまでのいきさつは、大日本山林会報287号(明治39年10月15日)(以下「会報

287号」)に詳しく記載されています。

神戸市は、東京帝国大学の本多静六博士に再度山の植林について指導を仰ぎます。明治32年(1899)に本多は現地を視察するとともに、神戸市内で森林の水源かん養について講演を行います。神戸市ではこれにより水源林造成の機運が高まったといえます。本多は明治33年にいわゆる『赤松亡国論』を発表し、濫伐暴採を嘆くとともに再度山の荒廃の事例も記しています。前年に現地を視察したことが赤松亡国論を発表するきっかけの一つになったと考えられます。

神戸市は兵庫県に現地の調査を依頼し、明治34年(1901)に県の林業巡回教師が調査を行います。明治35年(1902)1月には、再び本多が外国人招聘教師カール・ヘーフェルとともに、現地の視察に訪れます。ヘーフェルはドイツ人で、前年の明治33年に開設された東京帝国大学林学第4講座(砂防講座)の初代担当です。2代目が明治37年(1904)から着任するオーストリア人のアメリカゴ・ホフマンで、愛知県のホフマン工事など日本の砂防工事に大きな業績を残しています。もし、再度山にヘーフェルでなくホフマンが来ていたら再度山の植林はまったく違ったものになっていたかも知れません。

2. 植林工事

(1) 試験植林

神戸市では、砂防工事や造林工事の実効性を確認するため、再度山の北側斜面で試験的に植林工事を実施します(写真1、2)。



写真-1 試験植林で施工された積苗工や谷留石堰堤

時期：明治35年2月から3月
面積：6反8畝26歩6合(約0.7ha)
内容：積苗工1,029間7合(約1,870m)、谷留石堰堤5箇所20坪(約66㎡)、植栽(松10,000本、山楡(ヒメヤシヤブシ)10,000本)

工事は県の林業巡回教師が指導監督を行いました。この試験植林の成績を見届け、明治35年度から神戸市の事業として造林工事が、36年度から兵庫県による砂防工事が始まります。

時期…明治36年度から昭和5年度(ころまで)
面積…(計画面積) 1,073町(約1,064ha)
内容…石堰堤、土堰堤、根石垣、谷止石垣、積苗工、植栽(松、山楡)



写真-3 砂防工事の施工直後。写っている人のうち一人は林業巡回教師と考えられる。

(2) 県による砂防工事
兵庫県は、市の要望を受け明治36年度から砂防工事を開始します(写真-3)。



写真-2 現存している谷留石堰堤。写真-1に写っているものと思われる。

時期…明治35年度から明治45年度
面積…574町(約567ha)
内容…植栽(松、楠、扁柏(ヒノキ)、山楡、杉、檜、樺、欅、楓、コブシ、ポプラ等)

(3) 神戸市の造林工事
神戸市の造林工事は明治35年度から本格的に始まります。
この造林工事は、神戸市森林整備事務所に保管されている造林台帳で内容が確認できます。初年度の明治35年度については字中一里山で砂防工事を実施しますが、その後は、再度山の南側区域(神戸港地方字口一里山)で植栽工事のみ行なったようです。多様な広葉樹を植栽しているのは本多静六の指導によるものと考えています。

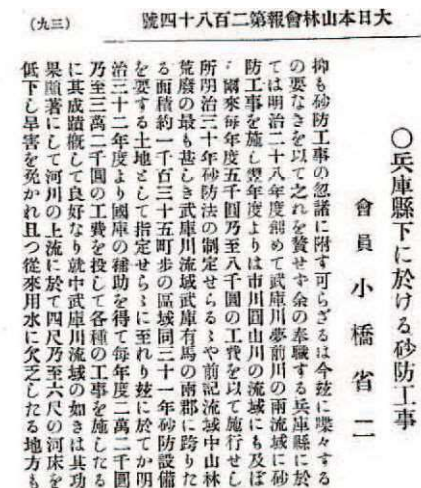


写真-4 大日本山林会報284号の小橋の報告「兵庫縣下に於ける砂防工事」

工事内容は大日本山林会報第284号「兵庫県に於ける砂防工事」(以下「会報284号」)(写真-4)で確認できます。明治39年度から昭和5年度までは、県庁砂防課に残る砂防工事台帳で工事内容が確認できます。

3. 神戸又新日報

会報287号の中で、明治35年11月13日に神戸市が新聞記者を現地に招き、現地状況と事業計画の説明をしたと記されており、それが、神戸又新(ゆうしん) 日報の記事で確認できます(写真-5)。明治35年11月15日・16日の記事「神戸市林政の経過を見る」の中で、現地で坪野神戸市長から植林の計画について具体的説明を受けた様子や、布引ダムを越えて布袋谷を遡ると、予算500円で設置した小貯水池が8月の降雨で一晩のうちに満砂した、中一里山に至れば再度山の後方の連山が全面赤砂に一草一木のみるべきものなく(原文ママ)など、荒廃状況の激しさを詳しく描写しています。また、積苗工について説明を受けたように、禿山の傾斜面に9尺毎の間隔で芝を平行に並べ松と髭縛(ひげしば)り(原文ママ)を雑植するとも記されており、非常に興味深い内容になっています。(次回号に続く)

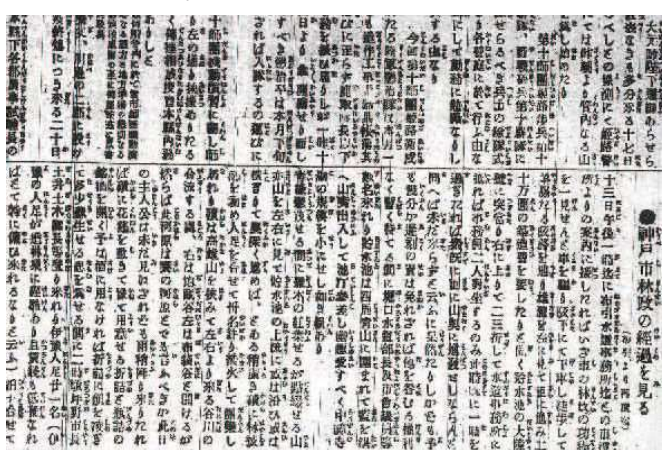


写真-5 神戸又新日報の記事